

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02536

研究課題名(和文)小学生は授業スタンダードをどのようにとらえているか

研究課題名(英文)How do elementary school students recognize class standards?

研究代表者

赤木 和重 (Akagi, Kazushige)

神戸大学・人間発達環境学研究科・教授

研究者番号：70402675

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、大きくは3つにまとめられる。1つは、小学生による授業スタンダードの認識を明らかにしたことである。具体的には、高学年になると、授業スタンダードについて、状況によっては否定的な認識を示すこと、そして、それは、子どもの権利意識の発達と関連があることを明らかにした。2つは、小学生の結果を踏まえて教師が、授業スタンダードの採否をどのように認識しているのかについても明らかにした。具体的には、教師は、基本的には、授業スタンダードに賛成の態度を示すことを明らかにした。以上を踏まえて、通常学級に焦点をあてたインクルーシブ教育の推進について議論した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、以下の2つにまとめられる。1つは、現在、注目されている授業スタンダードについて批判的視点も含めて多角的な議論を行う知見を提供したということである。2つは、インクルーシブ教育、とくに通常学級の教育改革を進めるうえでの視座を提供するところにある。

研究成果の概要(英文)：The results of this research can be summarized into three parts. First, we clarified elementary school students' perceptions of lesson standards. Specifically, we found that children in higher grades express negative perceptions of class standards depending on the situation, and that this is related to the development of children's sense of rights. Second, we also clarified how teachers perceive the acceptance or rejection of lesson standards based on the results of elementary school students. Specifically, it was revealed that teachers basically showed an attitude in favor of class standards. Based on the above, we discussed the promotion of inclusive education with a focus on regular classes.

研究分野：発達心理学

キーワード：授業スタンダード インクルーシブ教育 小学生

## 1. 研究開始当初の背景

近年、我が国の学校教育において「授業スタンダード」の考えや手法が広まっている。授業スタンダードとは、「授業展開や指導方法、学習規律について定めた規範」(澤田, 2018)と定義される。「〇〇小学校スタンダード」と称して、学校内でこのスタンダードを統一しようという流れが強い。例えば、「グーピタピン」などと姿勢に関して明確・統一化したり、話型を提示して話し方や大きさを統一しようというものがある。また、どの授業でも「めあて」を書くようにしたり、大事なことは黄色のチョークで囲むといった指導技術を学校間で統一するものがある。このような授業スタンダードは、細かい内容は異なるものの、全国の多くの学校、特に小学校で広まっている。全国の教育委員会を対象に調査を行った澤田(2018)によれば、31自治体(65.9%)の教育委員会が、授業スタンダードを作成しており、しかも、それらは、2011年以降に急増していることが明らかにされている。

授業スタンダードは、学力向上・特別支援教育・若手教員養成といったいずれも現代の学校教育につながる重要な事象といえる。しかし、もしくは、それゆえに、授業スタンダードについて、様々な批判が出されている。

1つは、学力向上についてのエビデンスが乏しいことである。実際、澤田(2018)を除けば、強いエビデンスは提出されていない。それゆえ、どの属性の児童に有効なのかといった検証もなされていない。2つは、インクルーシブにはつながらないという批判である。画一化して発達障害児を包摂しようとする授業スタンダードが、むしろその枠からはみ出しやすい子どもを可視化させ、逆に排除するほうに機能するという批判が出されている(赤木, 2017)。3つは、若手教師がスタンダードに従属してしまい、教師の創造性の芽をつみ、長期的には教員の授業力の低下につながるという批判である(苫野, 2016)。

このように、授業スタンダードをめぐる様々な議論が行われている。しかし、肯定的な立場、否定的な立場双方に欠けている点がある。それは、小学生児童が授業スタンダードをどうとらえているのかについての視点が皆無だということである(赤木, 2019)。

しかし、「子ども主体」という言葉を使うまでもなく、教育のよりよい改善を行ううえで、当事者である児童の授業スタンダードに対する認識は、重要な判断根拠になる。彼ら/彼女らの認識ぬきに、どれだけ賛否を議論しても、それは「空中戦」であり、実質的な教育実践の向上につながりにくいだろう。

## 2. 研究の目的

以上を踏まえ、本研究の目的は、小学生が、授業スタンダードをどのように認識しているのかを明らかにすることである。

## 3. 研究の方法

研究1: 小学生における授業スタンダードの認識について検討する。学年が上がるにつれて、スタンダードに対して肯定的(もしくは否定的)にとらえる割合の変化を明らかにする。ただし、同学年でも個人差があることが予想される。そこで、「みんなの行動や意見にあわせる」という同調性の発達、および「学習環境は自分で決めてよい」という個人の権利の発達についても検討する。同調性が高いほどスタンダードに肯定的であり、逆に個人の権利が発達するほど否定的になるかについて検討する。

研究2: 担任教師の授業スタンダードに対する態度が、子どものスタンダードへのとらえ方にどう影響しているのかについて検討を行う。小学生は、日常的に接する担任の姿勢に影響を受けるため、スタンダードについても子どもの発達によるだけではなく、教師のスタンダードのとらえ方が大きいと考えられるからである。

## 4. 研究成果

研究成果は、以下のような点がまとめられた。なお、コロナ禍での研究実施ということもあり、当初の目的からは多少変更せざるをえなかった点もある。

小学校公立小学校の児童2年生から6年生、600名余りを対象に、小学生による授業スタンダードに対する認識に対するデータを収集した。主要な知見として、(1)「授業スタンダード場面課題」において、低・中学年である2, 3, 4年生は授業スタンダードに賛成する児童が多く、高学年である5, 6年生は反対する児童が増えた、(2)「個人の権利意識尺度」の結果は、高学年において個人の権利意識の発達と授業スタンダード反対との関連が示された。これらの結果をもとに、「心理科学」という雑誌に投稿し、掲載された(前岡・赤木, 2021)小学校教員を対象に、その教員が所属する小学校児童の授業スタンダードに対する認識の結果(前岡・赤木, 2021)を提示し、授業スタンダードに対する採用意向を尋ねた。その結果、予想した以上に、授業スタンダードへの採用意向が強かった。ただし、対象となる子どもの学年によって、その採用理由は異なることも明らかになった。具体的には、低学年であれば、

「子どもの発達や学習のため」といった理由が多いのに対し、高学年では「規範意識情勢のため」という理由が前景化してることが明らかになった。加えて、授業スタンダードを採用する意向を答えた教員のなかにも、「学習態度に落ち着きが見られる場合は採用しない」といった留保をつける回答も少なからず見られた。このことは、授業スタンダードを採用する場合においても、教員のなかでも、いくつかの条件や葛藤があることも明らかになった。この結果は、授業スタンダードがなぜ広まるのかについての学級経営の視点から示唆を与える（前岡・赤木，2022）。

以上の知見をもとに、2022年の日本教育方法学会第58回大会において、「教師と子どもから見た授業スタンダード」というラウンドテーブルを企画・開催した。澤田俊也先生、前岡良汰先生、巨理陽一先生をお招きして、授業スタンダードの現在と課題について研究交流を行うことができた。

授業スタンダードから距離をとっているような学校現場を訪問し、そこでの知見をまとめた。具体的には、軽井沢風越学園に継続的にフィールドワークを行い、授業スタンダードによらない形で、どのように授業を実施しているのかについて、主に探究学習および集団づくりに注目して、いくつかの記事の執筆を行った。その成果は、軽井沢風越学園のWeb記事（かぜのーと）に掲載された。

研究分担者である下木なつみ氏および江上弘晃氏（いずれも神戸大学附属特別支援学校教諭）と共同で、「特別支援学校高等部における3年間の陶工実践：教師主体から生徒主体への授業づくり」と題した学術論文を公刊した。地域の小学校を対象とした研究ではないものの、画一的になりがちな特別支援学校高等部部の作業学習において、障害のある生徒が、それぞれ自分のつくりたい器をつくりながら制作していくプロセスについて、若手教師の認識の変化とともに、実践報告を行った。

以上の研究知見をもとに、展望論文を執筆した（赤木，2023a；2023b）。赤木（2023a：SNEジャーナル）では、授業スタンダードをはじめとする画一的な学級規範や規律が、当初のねらいとは乖離して、通常学級に在籍することが難しい発達障害のある子どもたちが増加する可能性を指摘した。そのうえで、赤木（2024b：教育目標評価学会紀要）では、そのうえで、学級規範に拠りながら、学級規範で遊ぶようなプロセスの在り方を指摘した。

本研究課題の知見をもとに、啓蒙的な著作を出版した。「子育てのノロイをほぐしましょう：発達障害のある子どもに学ぶ」という一般向けの著作で、「おなじのノロイ」として画一的な子育て・指導の問題について触れた。また、「教職研修」という学校管理職向けの雑誌においても、授業スタンダードの問題について指摘した。

今後の課題としては、このような授業スタンダードが、どのようにインクルーシブ教育の進展や排除につながるのかについて、実証的に研究を行うことである。なお、この点については、現在のところ、小学校在学時期に通常学級から特別支援学級に転籍するとう事象に注目している。そのことで、本来は包摂する意図を目指していた授業スタンダードが、逆に機能する可能性について検討することができればと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 赤木和重	4. 巻 676
2. 論文標題 自閉症教育における支援プログラムとの「ほどよい」つきあいかた	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 みんなのねがい	6. 最初と最後の頁 15-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石井 正幸, 赤木 和重	4. 巻 28
2. 論文標題 特別支援学校教員を対象とした協調運動の困難な知的障害児の理解と支援に関する意識調査：教員個人の専門性・校内連携・外部連携に注目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 SNEジャーナル	6. 最初と最後の頁 148-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤木和重	4. 巻 28
2. 論文標題 書評 内藤千尋著『発達障害等を有する非行少年と発達支援の研究』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 SNEジャーナル	6. 最初と最後の頁 162-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前岡 良汰, 赤木 和重	4. 巻 43
2. 論文標題 小学校教師は授業スタンダードを採用したいのか：自校児童の授業スタンダードに対する調査結果を踏まえた検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 心理科学	6. 最初と最後の頁 106-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤木 和重, 川地 亜弥子, 津田 英二, 河南 勝, 佐藤 知子, 殿垣 亮子, 柴田 真砂代, 黒川 陽司	4. 巻 16(2)
2. 論文標題 知的障害青年の大学教育プログラムはなにをもたらしたか? : 教育専門職養成大学における3年間の実践を通して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要	6. 最初と最後の頁 87-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前岡 良汰, 赤木 和重	4. 巻 42
2. 論文標題 小学生は授業スタンダードをどのように捉えるのか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理科学	6. 最初と最後の頁 1~13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20789/jraps.42.1_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤木和重	4. 巻 49
2. 論文標題 障害のある子どもと即興的表現活動 : 教育的ユーモアとしての「よじれたノリ」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 障害者問題研究	6. 最初と最後の頁 178-185
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 生田邦紘, 赤木和重	4. 巻 42
2. 論文標題 軽度知的障害のある青年の障害受容 : 「ふつう」にこだわっていた青年は、なぜ「ふつう」にこだわらなくなったのか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理科学	6. 最初と最後の頁 97-118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前岡良汰・赤木和重	4. 巻 印刷中
2. 論文標題 小学生は授業スタンダードをどのように捉えるのか：個人の権利意識の発達の観点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理科学	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 赤木和重	4. 巻 542
2. 論文標題 発達障害のある子どもの安楽さを大事に：学童保育だからこそ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本の学童はいく	6. 最初と最後の頁 28-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 赤木和重
2. 発表標題 教師と子どもから見た授業スタンダード：定量的研究の知見から（企画・司会）
3. 学会等名 日本教育方法学会第58回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 赤木和重
2. 発表標題 今、日本の特別支援教育で何が起きているか？：国連の障害者権利委員会による日本の「障害児を分離している現状の特別支援教育」への要請から考える（話題提供）
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 赤木和重
2. 発表標題 障害のある子どもたちによる 即興的表現と創造的知性
3. 学会等名 パフォーマンスアプローチ心理学研究会第12回
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 赤木和重
2. 発表標題 インクルーシブな場と障害児の学習権：特別支援学級・学校の在籍率の視点から（課題研究2 話題提供）
3. 学会等名 教育目標・評価学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 赤木和重
2. 発表標題 「多様性の教育学」構築に向けた対話と研究のインクルージョン:特別支援教育の視点
3. 学会等名 異文化間教育学会研修会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 赤木和重
2. 発表標題 “Let's talk about our practice of developmental support: The cultural comparison of humour in Britain and Japan”
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会・プレワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 生田邦紘, 赤木和重
2. 発表標題 特別支援学校の教師は、軽度知的障害のある青年の「障害受容」をどのように捉えているか？
3. 学会等名 日本質的心理学会第18回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 赤木和重
2. 発表標題 大学における 履修証明制度を活用した 知的障害青年の学び (自主シンポ: 大学における知的障害青年の学びと課題)
3. 学会等名 日本特殊教育学会第59回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 赤木和重
2. 発表標題 第3の実践としての逆SST (自主シンポ / 逆SSTの可能性: 新しい支援のための対話的当事者理解の試み / 指定討論)
3. 学会等名 日本教育心理学会第63回総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 前岡良汰, 赤木和重
2. 発表標題 小学生は授業スタンダードをどのように捉えるのか: 個人の権利意識の発達の観点から
3. 学会等名 日本特別ニーズ教育学会第26回研究大会 (Web大会)
4. 発表年 2020年



## 〔図書〕 計8件

1. 著者名 WILLこども知育研究所	4. 発行年 2022年
2. 出版社 金の星社	5. 総ページ数 48
3. 書名 友だちのこまったがわかる絵本 みんなちがってみんないい	

1. 著者名 日本応用心理学会、応用心理学ハンドブック編集委員会、藤田 主一、古屋 健、角山 剛、谷口 泰 富、深澤 伸幸	4. 発行年 2022年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 858
3. 書名 応用心理学ハンドブック	

1. 著者名 赤木和重、DVD監督 / 富田直樹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひとなる書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 DVD付特別版アメリカの教室に入ってみた	

1. 著者名 時岡晴美、大久保智生、岡田涼、平田俊治	4. 発行年 2021年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 216
3. 書名 地域と協働する学校	

1. 著者名 西岡加名恵, 石井英真	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 264
3. 書名 教育評価重要用語事典	

1. 著者名 石井英真 (分担執筆: 赤木和重)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東洋館出版社	5. 総ページ数 320
3. 書名 流行に踊る日本の教育	

1. 著者名 赤木和重	4. 発行年 2021年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 208
3. 書名 子育てのノロイをほぐしましょう	

1. 著者名 心理科学研究会 (分担執筆: 赤木和重)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 294
3. 書名 中学・高校教師になるための教育心理学 [第4版]	

〔産業財産権〕

〔その他〕

赤木和重研究室HP  
<https://akagikazushige-1.jimdosite.com/>  
赤木和重研究室  
<https://akagikazushige-1.jimdosite.com/>  
発達障害心理学（赤木和重）研究室  
<https://akagikazushige-1.jimdosite.com/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	下木 なつみ  (Shimoki Natsumi)  (60901361)	神戸大学・附属学校部・特別支援学校教諭    (14501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------